

村田自然塾 カヌーツアー体験

"ダイスケ、チャボ波にびびる"の巻

by 中川洋子

3月29日。今日はヒョカン。波も静かで 絶好のカヌー日和。

ヒゲさんの涙もちょちょぎれそうな お客さん1名 ガイド付のシーカヤックツアーが始まった……

指導者ヒゲさん、弟子ダイスケ(高1)、客ナカガワ、便乗釣り客セッキーの不安な顔ぶれの4人組。出発前「行き先はバラス島やぞえ」とナカガワに聞かされ、「いやあめんば所で釣りはしようない。」とさんざんゴネていたセッキーも、実は行き先が自派沖と聞いて、ニコニコして車に乗ったのだった。(実はナカガワは客1名と聞いて、ついでにけいひんがどうか心配になり、カヌーの遅そうなセッキーを道連れにスカウトしたのだから、実はセッキーはカヌーもくぐりがすこく速かったのだった……)

さて、カヌーについての説明を聞きカヌーに乗り込んだのだが、乗るとすぐ風にあおられる。自派港の中にもけこうきつ。舟浮のむかひの第1の休憩場所である砂浜をめざすが南風が吹いていて、けこう向い風でしんどい。何気なくセッキーと話をして、砂浜をめざしていると、ハッと気づくと、私たち2人は

とんでもない所を走っていた。

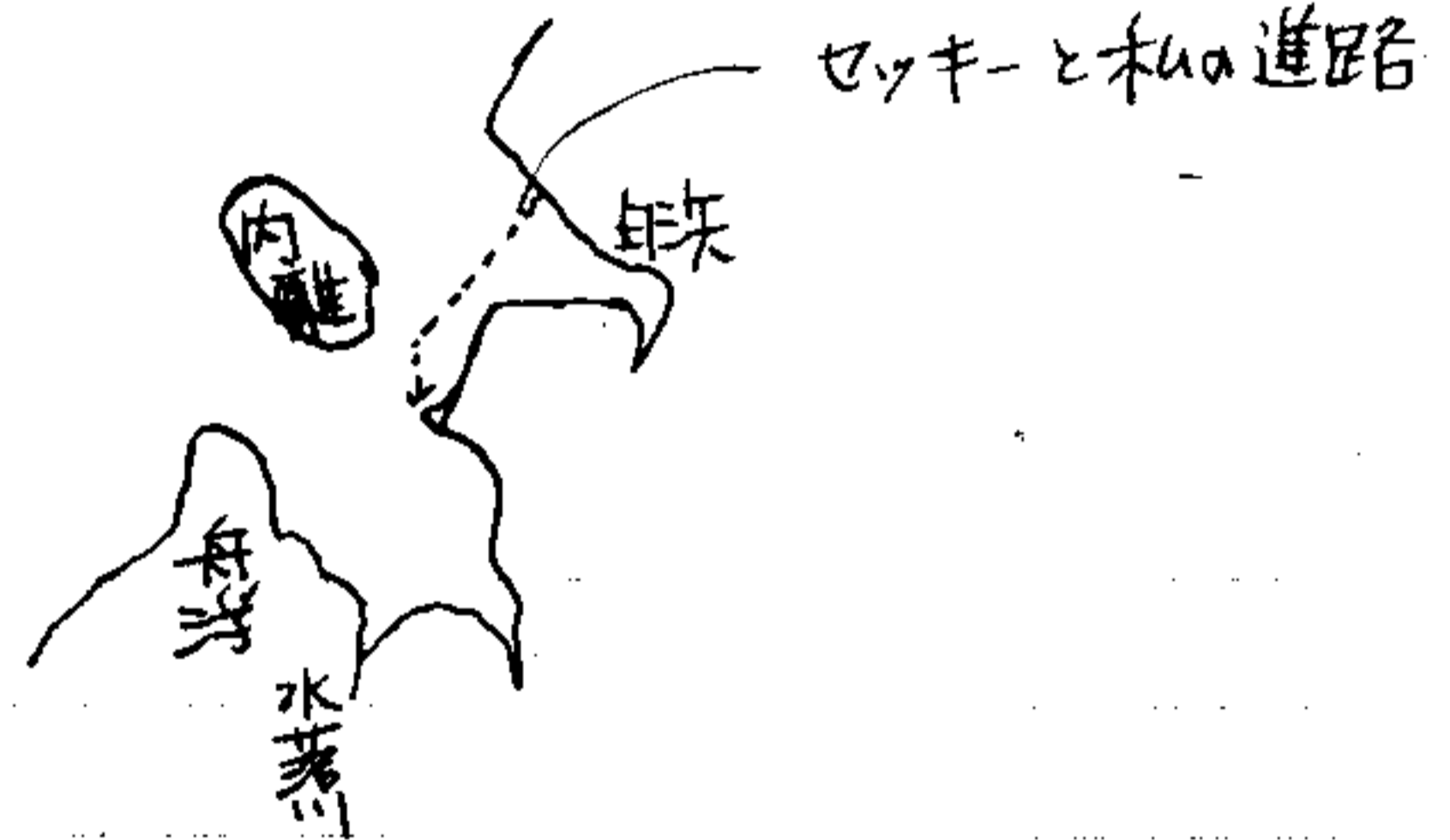
まわりを見回すとみんないない。

みんなは岸にぞいて走っていた。

私とセッキーは目的地はかきを見ていた

ために、最短距離コースをとっていたのだが

それは大きなまちがひだった。



岸近くなら風も弱いのに、「直線距離の短かさ」につられて、わざわざ岸と岸の間、ド真ん中の海 = 風の通り道を通っていたのだ。しかも、セッキーは私を見捨てるあの太い腕でドンドン力にまかせにぎ進む。ハトハトになり砂浜に着いた私を待っていたのは、「遊んでたんか？ わざわざめんば所を通る。もつと、まわりの山や風を見て判断せい！」という、ありがた〜い塾長のお叱りの言葉であった。

そして、塾長が言は、ダイスケに次々とあびせられた。だいたい、出発前にスポンジを入れ忘れていたので、塾長は、すでに切れていたのだから、そへも、マキマ、ダイスケが次々とハマをするの2、塾長は心安まる時がなかった。

休憩の時のバーナーの組み立て方や茶の入れ方、荷物のつめ方 etc. …… ダイスケはいっぱいいっぱい怒られていた。だいたいこの子はさき言われたことを忘れていたのだ。しまいめに、「今日朝から怒られたことを言ってみろ。どんだけ覚えているか。」とヒゲさんに言われ、「えーっと、ヒゲは、ドロのついたビール袋をテーブルに置かない、次は……」と素直に怒られた内容を言うのはいいのだが、その中味はあまりトホホだった。

「だいじょぶだろうか、これで...」と思つた予感ほ的の中し。ダイスケは食事場所でもフランスパンをうす切りにしたり、フタもせずナベを火にかけてたり、ナベをひっくり返し熱湯をぶちまけたり、(もともこれはトツテがとれたせいだが)して、怒られ続けた。

セゲさんは、怒り続け、フーフー言いながら、「もう疲れるわ。わしゃあ。」と心底くたびれていようだった。

しかし、この時の食事は最高だった。パンに西表特製のバッションフルーツジャム、セゲさん特製のサラダにチーズやハムがメチャうまい。カレーもこいだあとで、外で食べる気持ちよさもあると思ふが、またたく間に3人でフランスパン一本と食パンのかたまりをたいらげしまった。大いに満足し、毎季々。

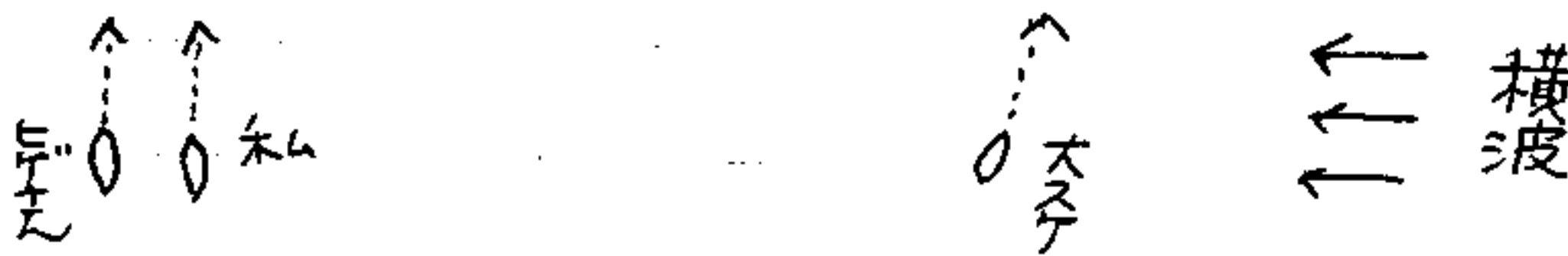
日本軍が戦時中に掘った穴、アカシヨウビツがザリガニとうちつけて割る石(あまりにうちつけるので石に白いスジがついている。)フクギやハマボウコウなどの木の石と教えてもらい話を聞く。

ガジュマルがしめ殺し植物と呼ばれるわけや、そこから進んで、熱帯植物の代表的な3種(しめ殺し植物、幹生植物、スオウキのように根の大きき張り植物)の話やウリヤミカンにつくハエの話など、次々と聞かせてくれる。やはり目の前で原物を見ながら説明されると楽しいし、わかりやすい。今度来た時、また違った目で見れそうだな。

最後に、浜でイシシの下アゴ(キバ付)をひいて帰る。

帰りは追い風でスースイ。潮がひいてすごく浅くサンゴが^{水を通し}すけて見える。こがなくても進む感じ。ところが、ここで不思議なことが起こった。

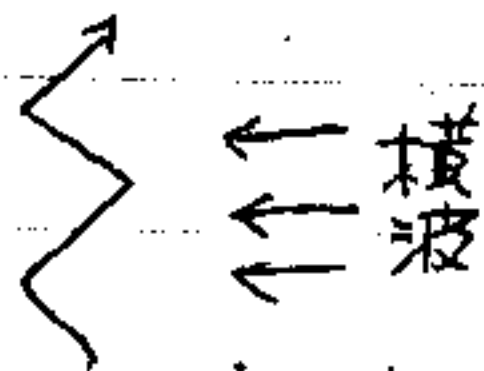
セッキーと合流するため石が浜に向かっているのだが、ふと気付くと、ダイスケがちがう方向をむいているのだ。



それにじつとうっむいて、パドルをもくもくと動かしている。



「なんか変やなあ」と思ひ、「方向をまちがってるんかなあ」とつぶやく私に、セゲさんは確信ありげに、「いやちがう。波がこわいからや。」と言う。呼び出して近かいてきたダイスケに聞くと、横波を直角にうけたらこわいので、方向を変えていたとのこと。本人は波に対して



ジグザグに進むつもりだったらしいが、そんな波といってもたかが30cmくらいのチヤブ波で、カヌーの中に入らなくもなない。

しかし、ダイスケは真剣だった。ハンドルを握る手と背中が固まっている。顔はこわばっている。そして目はじーっと自分の舟の近くの海面を見下ろし、ちょっとでも波がくると向きを変えているのだ。そして少し波があると、自然に「おおーっ」とか「ああーっ」という声(悲鳴?)が出る。びびりまくっているのだ。

いくら、「ひっくり返らないから」とヒゲさんが言っても、固まっている。私たち二人は、悪いと思いつつ、陸の上ではエラソーなのに、海の上ではカタナシのダイスケに爆笑し合った。そして、調子に乗ったヒゲさんは、「このへんは、サーフィンやってた人がサメにあそわれる。サーフィン=歯型(が)っ」とか「頭が二のくらい(50cmくらいを舐むがら)あるサメも漁師がつかまえた」とかおどかし続け、ダイスケの「えー、ホントー!?!」という悲痛な叫び(本当にマジ)を聞きながら、あまりに笑い続けたために、しまいには腹筋が痛くなるまでだった。

私たちと別れて石ヶ浜で釣りをしていたセッキーは、10匹ほど釣るエサもなかつた。貝とりをしたらいいが、ホクホクだった。

そして無事白浜港に着いた時、ダイスケは「陸、いいなあ…」とホッソリとつぶやいたのだ。大教訓：カヌーでの横波には気を付けよう。

サメには、トラもようがまく。

それにしても、ヒゲさんのようなガイドは他にいないと思う。

たとえば、水碓の滝も私たちが行った20分後にはもう海が干上がり、行けなくなっていたが、そういう読みがすごい。自分が自然を研究し、そのことが知識や経験になってたぐわえられ、それを実物の動物や植物に接して教える。

私ひとりでこのガイドを受けものは本当にもったいなかったし、もっとみんなが参加すればいいのに、と思います。

みんな、ヒゲさんのガイド、一回体験してみてください。

そして、ガイドもヒゲさんに頼みこんでください、ひろみさん、本当にありがとうございます。

よかったです、本当に。